野地潤家 著

話しことば教育史研究

野地潤家先生は、昭和四一年九月、広島大学に、学位請求論文「近代国語教育史研究」を提出された。当時、学部の四年生だった私は、近代話しことば教育史に関する気の遠くなるほどの紙数に及ぶ学位論文を、野地先生がおまとめになったことを伝え聞き、また、泊り込みでその整理を手伝われた研究室や大学院の方々のいかにも殺気だった忙しさをまのあたりに見て、学位を請求するということの重さを痛感し、深い感銘を覚えた。それ以来、先生が堀秀成や福沢諭吉を話題にされて話しことばの教育についてお話しになる時、これは学位論文にお書きになったことにちがいないと、襟を正す思いで拝聴したものである。先生のご論文にこのような思いを寄せてきたのは、私一人ではないはずである。先生のご論文は、多くの人々に待望されて、一四年目にしてようやく一冊の本にまとめられた。それが本書である。

さて、本書は、「近代国語教育史研究」のうち、第二編に収録されたご論稿を中心に増補されまとめられたもので、A五判一一九七ページにも及ぶ大著である。目次によってその内容ならびに構成を見ると、つぎのようになっている。

Ⅰ　明治前期の話しことばの教育

第一章　堀秀成の説教論の成立と内容　第二章　福沢諭吉の話しことばの教育　第三章　明治一〇年代の話しことばの教育―演説形態を中心に―　第四章　明治前期における会議形態の成立過程　第五章　馬場辰猪の「雄弁法」の内容と位置　第六章　明治二〇年代の話しことばの教育―「婦人談話会旨趣書」を中心に―

Ⅱ　明治後期の話しことばの教育

第七章　明治三〇年代の話しことばの教育（その一）―横山健三郎著「話方教授之枝折」を中心に―　第八章　同上（その二）―與良熊太郎氏のばあい―　第九章　同上（その三）―明治三四年（一九〇一）を中心に―　第一〇章　同上（その四）―独話事例を中心に―　第一一章　同上（その五）―話しことば教科書を中心に―　第一二章　伊沢修二の話しことばの教育

Ⅲ　大正期の話しことばの教育

第一三章　大正期の話しことばの教育（その一）―「国語教育」話方号を中心に―　第一四章　同上（その二）　第一五章　芦田恵之助の話し方教授論　第一六章　大正期の話しことばの教育（その三）―静岡女子師範附小のばあい―　第一七章　台湾における話しことばの教育　第一八章　「話方の経済」（森本厚吉著）の位置と内容

Ⅳ　昭和期（戦前）の話しことばの教育

第一九章　昭和初期の話しことばの教育（その一）―「国語教育」第二話方号を中心に―　第二〇章　同上（その二）　第二一章　山崎正董博士の演説および式辞　第二二章　峰地光重氏の話聴教育　第二三章　昭和一〇年代の話しことばの教育―国民学校のばあい

Ⅴ　旧制中学校の話しことばの教育

第二四章　旧制中学校の話しことばの教育―「桐蔭間話」（森本角蔵氏著）から―　第二五章　同上―弁論活動を中心に―

先生は、今日までに大きな成果をあげてきたわが国の近代国語教育史研究にも、なお未開拓の分野があることを指摘され、その一つに話しことばの教育の分野をあげられる。目次を見てもわかるように、本書において先生は、膨大な文献や資料によりながら、この未開拓の分野を実証的かつ体系的に明らかにしていこうとされている。その成果については、本書のあとがきにおいて、先生自ら、つぎのように述懐されている。

「以上、第一章から第二五章まで、話しことば教育史研究として、社会・学校（小学校・国民学校・旧制中学校）のいずれのばあいも考慮して、近代における話しことばの教育の源流・成立・展開について探究した。近代国語教育史において、不振・未開の分野と目されていた話すこと・聞くことの領域も、歴史的にたどってみるなら、思いのほかに充実した歩みもなされていた。それらの歩みを克明に追跡しつつ、わが国における話しことばの教育が集積してきた仕事の実態・実質をとらえようと努めたのであった。たどってみれば、広大な領野であるだけ、遺漏も少なくないが、『話すこと』（「聞くこと」を含む）の形態・領域が、話しことばの教育の対象として、どのように成立し、構築されたのかの問題は、本書の考察によって、ほぼ明らかになったかと思う。」

ところで、話しことばの教育の面でわが国よりも長い歴史をもつアメリカにおいては、近代話しことば教育の源流・成立・展開が、三〇人を越える研究者によって究明され、一九五四年、"A History of Speech Education in America-Background Studies"（アメリカ話しことば学会編）として刊行された。この本を手にするたびに、私は、その取り組みの規模の大きさに圧倒され、わが国の話しことばの教育の史的研究の立ち遅れを、いやおうなく感じさせられてきた。本書は、そのような長年のもどかしさを一挙にはらいのけてくれる。

本書は、個人の仕事としては信じられないほどの拡がりと、個体史的研究方法による深まりをもっており、わが国の近代国語教育史研究の領野に大きな足跡を残すものとして高く評価されると思われる。

（A五判一一九七ページ、昭和五五年九月一〇日、共文社刊　三〇、〇〇〇円）

（足立　茂美）